22　燈台　一面

山本森之助

大正九年（一九二〇）
油彩、キャンバス
八〇・三×一〇〇・三

夕焼けに照らし出された燈台と入り江の穏やかな情景が描かれている。本作の主要モチーフは、大正八年（一九一九）に点灯を開始した房総半島最西端の洲崎燈台であり、翌年七月から九月にかけて、山本森之助は同地へ写生旅行に訪れている。本作は第二回帝展に出品された後、宮内省に買い上げられることとなった。

画面全体に満ちる夕焼けのなかに、シルエットを効果的に用いて各モチーフが描き出されている。こうした描写法は《三保の朝》（一九二一年、個人蔵）などにも見られ、この時期の山本が夕景を描く際にしばしば用いた手法であった。ただし、山本は明暗を的確に使い分けるだけでなく、光の微妙な諧調を描写することで、時間の移ろいを情感豊かに表している。現場での写生を第一に優先して、実直に自然を観察し続けた山本らしい、繊細な風景表現が魅力的な作品である。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

海と山のあいだ ―近代日本の風景描写
三の丸尚蔵館展覧会図録No.86

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社アイワード
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
令和二年七月二十三日発行

©2020, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan